

# 病害虫発生予察情報（7月予報）

令和元年6月26日  
静岡県病害虫防除所長

## 1 予報概況

作物名	病害虫名	予報 (7月の県平均平年値)	予報の根拠
イネ	葉いもち・穂いもち	発生量：やや少 (発病株率 1.62%)	6月上中旬の葉いもち発生量：少(－) 気象予報：気温：並(±) 降水量：並～多い(+)
	縞葉枯病 (ヒメトビウンカ)	発生量：少 (発病株率 0.4%)	6月上中旬の縞葉枯病の発生量：少(発生なし)(－) 6月上中旬のヒメトビウンカの発生量：少(－) 6月の予察灯誘殺数：並(±) 気象予報：気温：並(±) 降水量：並～多い(－)
	セジロウンカ	発生量：少 (寄生虫数 1.6頭/株)	6月上中旬発生量：少(発生なし)(－) 6月の予察灯誘殺数：並(±) 気象予報：気温：並(±) 降水量：並～多い(－)
	斑点米カメムシ類	発生量：少 (平年捕獲数 21.4頭/30回 すくいとり)	6月上中旬発生量：少(－) 6月の予察灯誘殺数：並(±) 気象予報：気温：並(±) 降水量：並～多い(－)
サツマイモ	ナカジロシタバ	発生量：やや多 (寄生虫数 0.3頭/m <sup>2</sup> )	6月上旬発生量：やや多(+) 気象予報：気温：並(±) 降水量：並～多い(±)
	イモキバガ	発生量：並 (巻葉数 2.8葉/m <sup>2</sup> )	6月上旬発生量：並(±) 気象予報：気温：並(±) 降水量：並～多い(±)
	エビガラスズメ	発生量：少 (寄生虫数 0.04頭/m <sup>2</sup> )	6月上旬発生量：少(発生なし)(－) 気象予報：気温：並(±) 降水量：並～多い(±)
ウンシュウミカン	黒点病	発生量：並 (発病度 0.2)	6月中旬発生量：並(発生なし)(±) 気象予報：気温：並(±) 降水量：並～多い(+)
	チャノキイロアザミウマ	発生量：少 (寄生果率 0.2%)	6月中旬発生量：少(－) 気象予報：気温：並(±) 降水量：並～多い(－)
	ミカンハダニ	発生量：少 (寄生葉率 14.7%)	6月中旬発生量：少(－) 気象予報：気温：並(±) 降水量：並～多い(－)

作物名	病害虫名	予報 (7月の県平均平年値)	予報の根拠
中晩柑	かいよう病	発生量：並 (発病度(果) 0.2)	6月中旬発生量：少(－) 気象予報：気温：並(±) 降水量：並～多い(+)
キウイ フルーツ	かいよう病	発生量：やや少	6月中旬発生量：少(－) 気象予報：気温：並(－) 降水量：並～多い(+)
果樹全般	カメムシ類	発生量：やや多 (西部地域ではやや少)	越冬量：やや多(+) かき花飛来量：並(±) 6月の成虫誘殺数：少(－) 気象予報：気温：並(±) 降水量：並～多い(±)
チャ	炭疽病	発生量：やや多 (病葉数 13.0 葉/1.25m <sup>2</sup> )	6月中旬発生量：並(±) 気象予報：気温：並(+) 降水量：並～多い(+)
	もち病	発生量：並 (病葉数 10.0 葉/1.25m <sup>2</sup> )	6月中旬発生量：少(－) 気象予報：気温：並(+) 降水量：並～多い(+)
	輪斑病	発生量：並 (病葉数 17.9 葉/1.25 m <sup>2</sup> )	6月中旬発生量：並(±) 気象予報：気温：並(±)
	チャハマキ	発生量：少 (寄生虫数 2.1 頭/1.25 m <sup>2</sup> ) 発生時期：並	6月中旬発生量：少(－) 気象予報：気温：並(±) 降水量：並～多い(±)
	チャノココクモン ハマキ	発生量：少 (寄生虫数 1.6 頭/1.25m <sup>2</sup> ) 発生時期：並	6月中旬発生量：少(－) 気象予報：気温：並(±) 降水量：並～多い(±)
	チャノホソガ	発生量：少 (巻葉数 1.1 葉/1.25 m <sup>2</sup> ) 発生時期：並	6月中旬発生量：少(－) 気象予報：気温：並(±) 降水量：並～多い(±)
	チャノキイロ アザミウマ	発生量：やや少 (叩き落とし虫数 14.0 頭/4 力所)	6月中旬発生量：やや少(－) 気象予報：気温：並(±) 降水量：並～多い(±)
	チャノミドリヒメ ヨコバイ	発生量：やや多 (叩き落とし虫数 2.8 頭/4 力所)	6月中旬発生量：やや多(+) 気象予報：気温：並(±) 降水量：並～多い(±)
	クワシロ カイガラムシ	発生量：少 (寄生株率 2.9%) 発生時期：並	6月中旬発生量：少(－) 気象予報：気温：並(±) 降水量：並～多い(±)
	ヨモギエダシャク	発生量：やや多 但し、牧之原は多 (叩き落とし虫数 0.1 頭/4 力所)	6月中旬発生量：やや多(+) 但し、牧之原は多(+) 気象予報：気温：並(±) 降水量：並～多い(±)

作物名	病害虫名	予報 (7月の県平均平年値)	予報の根拠
キク (施設)	白さび病	発生量：やや少	6月中旬発生量：少(発生なし)(-) 気象予報：気温：並(±) 降水量：並～多い(+)
	黒斑・褐斑病	発生量：並	6月中旬発生量：並 気象予報：気温：並(±) 降水量：並～多い(+)
	えそ病(トマト黄化えそウイルス：TSWV)	発生量：少	6月中旬発生量： えそ病：少(発生なし)(-) 気象予報：気温：並(±)
	アザミウマ類	発生量：並	6月中旬被害：並(±) 気象予報：気温：並(±)
	アブラムシ類	発生量：並	6月中旬被害：並(±) 気象予報：気温：並(±)
	オオタバコガ	発生量：並	6月中旬被害：並(±) 6月の成虫誘殺数：並(±) 気象予報：気温：並(±)

#### 表の見方について

- ・ 予報の発生量は平年(静岡県の過去10年間)との比較で、「少、やや少、平年並、やや多、多」の5段階で示しています。
- ・ 予報の発生時期は、時期の予想ができる病害虫に限り、平年(静岡県の過去10年間)との比較で、「早、やや早、平年並、やや遅、遅」の5段階で示しています。
- ・ 予報の根拠には、巡回調査に基づく発生状況(調査時期と発生量)、気象庁の1ヶ月予報(気温と降水量)を記入しています。その状況が多発要因の場合は(+)、少発要因の場合は(-)を示し、+-を総合的に判断して発生時期、発生量を予想しています。

農薬情報は  
こちらで検索!



静岡県農薬安全使用指針  
・ 農作物病害虫防除基準

<http://www.s-boujo.jp/>

## 2 予報の根拠と防除対策

### 【イネ】

#### <生育の概況等>

巡回時の生育調査（下表、調査期間：6月3日～17日）では、草丈、茎数、葉色の数値は平年よりやや小さかった。なお、病害虫防除員の情報によると、生育は概ね平年並である。

6月	田方 平坦地	東部 高冷地	志太榛原	中遠・西部 (普通期)	中遠 (早期)
草丈 (cm)	20.4 (22.7)	25.1 (34.2)	22.9 (25.1)	26.6 (31.1)	32.2 (48.3)
茎数 (本)	5.7 (9)	11.9 (18.4)	9.8 (11.4)	8.4 (12.5)	13.6 (23.4)
葉色 (指数1-7)	2.9 (4)	4.4 (5)	3 (4.1)	3.1 (4.1)	4.2 (4.5)

( )内は平年値

### ●葉いもち・穂いもち

#### 予報の根拠

- ・6月上中旬の巡回調査では、中遠地域の一ほ場で葉いもちの発生が確認され、発病株率は0.19%であった（平年発病株率0.5%）。
- ・西部の1地点の置き苗でいもち病の発生が確認された。
- ・1ヶ月予報によると、気温は平年並、降水量は平年並～多いため、発生を助長する（感染好適条件：気温15℃～25℃、葉面湿潤時間10時間以上、前5日間の平均気温が20℃～25℃を全て満たす時）。

#### 防除対策

- ・置き苗は本田に植え付けた株より早期に葉いもちが発生し、いもち病の伝染源になりやすい。田植え後できるだけ早く補植をすませ、不要な苗は速やかに処分する。
- ・育苗箱処理剤の残効は出穂期頃までなので、効果の切れた時期以降で、本病の発生に適した雲雨天で日照不足が続く場合は注意が必要である。
- ・梅雨の時期は特に発生しやすい気象条件となるため、上位1～3葉に病斑が見られる場合は適期（穂ばらみ期～穂ぞろい期）に必ず防除を実施する。特に急性型病斑（周辺部に褐色部分がなく、暗緑色あるいはねずみ色の病斑）が多いときには、速やかに薬剤散布をする。
- ・常発地では薬剤の予防散布を行う。
- ・本県ではMBI-D剤（「ウィン」、「デラウス」または「アチーブ」を含む剤）耐性いもち病菌が発生している。また、他県ではQoI剤（「アミスター」または「嵐」を含む剤）耐性いもち病菌が発生し問題となっている。本県でも耐性菌の発生が懸念されるため、発生リスクが高い薬剤を使用する場合は、連用を避けるなど適切に使用する（詳細は県病害虫防除基準の「殺菌剤耐性菌に関する各種資料について」の項を参照）。

## ●縞葉枯病（ヒメトビウンカ）

### 予報の根拠

- ・ 6月上中旬の巡回調査では、縞葉枯病の発生は確認されなかった（平年0.05%）。
- ・ 本病を媒介するヒメトビウンカの6月上中旬の平均最多寄生数は0.08頭/株（平年0.3頭/株）と平年より少なかった。
- ・ 6月第3半旬時点の県内4ヶ所の予察灯では、ヒメトビウンカの誘殺数は平年並で推移している。
- ・ 1ヶ月予報によると、気温は平年並、降水量は平年並～多いため、ヒメトビウンカの増殖を特には助長しない。

### 防除対策

- ・ 例年、縞葉枯病が発生する地域ではヒメトビウンカの発生に注意し、特にイネの感受性の高い幼穂形成期頃までを中心に防除を行う。

## ●セジロウンカ

### 予報の根拠

- ・ 6月上中旬の巡回調査では、セジロウンカの発生は確認されなかった（平年0.06頭/株）。
- ・ 6月第3半旬時点の県内4ヶ所の予察灯では、セジロウンカの誘殺数は平年並で推移している。
- ・ 1ヶ月予報によると、気温は平年並、降水量は平年並～多いため、セジロウンカの増殖を特には助長しない。

### 防除対策

- ・ 株元をよく観察し、成幼虫が多寄生する場合やすす病が発生している場合は直ちに薬剤を散布する。

## ●斑点米カメムシ類（アカスジカスミカメ、アカヒゲホソミドリカスミカメ等）

### 予報の根拠

- ・ 6月上中旬の水田畦畔・雑草地等における斑点米カメムシ類の発生は、平年より少なかった（30回すくいとり平均捕獲数7.2頭：平年22.7頭）。
- ・ 6月第3半旬時点の県内4ヶ所の予察灯では、アカスジカスミカメの誘殺数は平年より少なく、アカヒゲホソミドリカスミカメの誘殺数は平年並～やや多く推移している。
- ・ 1ヶ月予報によると、気温は平年並であり、降水量は平年並～多いため、カメムシ類の増殖を特には助長しない。

### 防除対策

- ・ 畦畔及び水田周辺の除草は、カメムシ類の密度低下に有効である。除草してない水田は早急に実施する。なお、出穂直前および以降の除草はカメムシ類を水田内に移動させてしまう可能性があるため、出穂の10日前までに除草を終了する。
- ・ 出穂後は水田内のカメムシ類の発生に注意し、確認された場合は薬剤防除を実施する。特に出穂期が周辺より早い水田はカメムシ類が集中するため、注意を要する。
- ・ 穂揃期（成虫侵入期）とその7～10日後（幼虫ふ化期）の2回薬剤散布を行うと防除効果が高い。粒剤は出穂期に散布する。

## <その他の病害虫>

### ●スクミリンゴガイ (ジャンボタニシ)

#### 発生状況

- ・ 6月上中旬の巡回調査では、スクミリンゴガイの発生面積率は38% (平年36%) と平年並であった。

#### 防除対策

- ・ 7月、水路壁面や畦波に赤橙色の卵が多数産卵されるため、見つけ次第卵をつぶす。なお、スクミリンゴガイには寄生虫 (広東住血線虫) が存在する可能性があるため、貝に触る場合は必ずゴム手袋をはめる。

## 【サツマイモ】

### <生育の概況等>

生育は平年並～やや遅れている。

### ●ナカジロシタバ

#### 予報の根拠

- ・ 6月上旬の巡回調査では、平均寄生幼虫数1.4頭/m<sup>2</sup>(平年0.4頭/m<sup>2</sup>) と平年よりやや多かった。
- ・ 1ヶ月予報によると、気温は平年並、降水量は平年並～多いため、発生をあまり助長しない。

#### 防除対策

- ・ 幼虫は齢期が進むと食害量が急増するため、例年発生するほ場では観察により早期発見に努める。
- ・ 7月に発生が増加するので、若齢幼虫が多数見られるようであれば薬剤防除を行う。

### ●イモキバガ (イモコガ)

#### 予報の根拠

- ・ 6月上旬の巡回調査では、平均巻葉数は0.5葉/m<sup>2</sup>(平年0.7葉/m<sup>2</sup>) と平年並だった。
- ・ 1ヶ月予報によると、気温は平年並、降水量は平年並～多いため、発生をあまり助長しない。

#### 防除対策

- ・ 例年、葉の繁茂に伴い巻葉数は増加する。多発する場合は防除を行う。

### ●エビガラスズメ

#### 予報の根拠

- ・ 6月上旬の巡回調査では、発生は認められなかった (平年平均寄生幼虫数0.2頭/m<sup>2</sup>) 。
- ・ 1ヶ月予報によると、気温は平年並、降水量は平年並～多いため、発生をあまり助長しない。

#### 防除対策

- ・ 中～老齢幼虫は1頭当たりの食害量が多いため、早期発見に努め、若齢幼虫のうちに防除を行う。

## 【ウンシュウミカン】

### <生育の概況等>

生育は平年並の地域が多い。

### ●黒点病

#### 予報の根拠

- ・ 6月の巡回調査では、発病が見られなかった（平年発生なし）。
- ・ 1ヶ月予報では、気温は平年並、降水量は平年並～多いため、本病の発生を助長する。

#### 防除対策

- ・ アメダスの気象データを用いたシミュレーションによる要防除時期は、6月上旬に防除を行った園では6月下旬、6月中旬に防除を行った園では7月上旬、6月下旬に防除を行った園では7月中旬となる（ホームページを参照）。
- ・ 今後の降水量が増えた場合は要防除時期が早まるため、シミュレーションよりも早めに防除を行う。また、前回の散布から25～30日を過ぎる場合には2回目の散布を行う。

### ●チャノキイロアザミウマ

#### 予報の根拠

- ・ 6月の巡回調査では、県平均寄生果率は0.1%（平年0.4%）で平年より少なかった。
- ・ 1ヶ月予報では、気温は平年並、降水量は平年並～多いため、本種の増殖を特に助長しない。

#### 防除対策

- ・ アメダスの気象データを用いた有効積算温度の予測では、第3世代成虫の発生ピークは7月第1～3半旬、第4世代成虫の発生ピークは7月第4～5半旬と予想される。各産地における成虫発生時期の予想についてはホームページを参照。
- ・ 薬剤防除適期は各世代の発生ピークである。各地域の発生ピークを参考に防除を行う。
- ・ 炭酸カルシウム微粉末剤25倍を6月上旬と7月中旬に計2回散布することによって、6月から8月にかけて、チャノキイロアザミウマを対象に化学殺虫剤を3～4回散布したのとほぼ同等の防除効果が得られる。なお、梅雨明け以降の散布は収穫時期に白斑が残りやすいため使用しない。

### ●ミカンハダニ

#### 予報の根拠

- ・ 6月の巡回調査では平均寄生葉率は4.4%（平年8.4%）で平年より少なかった。なお、西部地域では、一部多発園地があった。
- ・ 1ヶ月予報では、気温は平年並、降水量は平年並～多いため、本種の増殖を特に助長しない。

#### 防除対策

- ・ 夏期（7～8月）は天敵（カブリダニ類、ハネカクシ類、テントウムシ類）の発生が多くなるが、ミカンハダニ類が多発している園（寄生葉率が30%を超える園）では薬剤防除を行う。

## ＜その他病害虫＞

### ●かいよう病

- ・ 6月の巡回調査では、平均発病度(葉)は0.02（平年値0.08）で、平年より少なかった。
- ・ ウンシュウミカンは中程度の耐性を持つが、中晩柑と近接している園では感染の恐れがあるため、感染の状況を見て防除を行う。

#### 防除対策

- ・ 強い風雨により本病の感染が拡大するため、発生が見られる園地では降雨前に予防散布を行う。
- ・ 夏芽のハモグリガによる被害は本病の発生を助長するため、ハモグリガの防除を行う。

## 【中晩柑】

### ●かいよう病

#### 予報の根拠

- ・ 6月の巡回調査では、平均発病度（葉）は0.2（平年値0.5）で、平年より少なかった。
- ・ 1ヶ月予報では、気温は平年並、降水量は平年並～多いため、本病の発生を助長する。

#### 防除対策

- ・ 強い風雨により本病の感染が拡大するため、発生が見られる園地では降雨前に予防散布を行う。
- ・ 夏芽のハモグリガによる被害は本病の発生を助長するため、ハモグリガの防除を行う。

## 【キウイフルーツ】

### ＜生育の概況等＞

生育は平年並である。

### ●かいよう病

#### 予報の根拠

- ・ 6月の巡回調査では、発病葉率は4.6%（昨年14.4%、平年値なし）であった。
- ・ 発病適温が10℃～20℃のため、平均気温が25℃を超える7月は病勢が停滞する。
- ・ 1か月予報では、気温は平年並、降水量が平年並～多いため、本病の発生を助長する。

#### 防除対策

- ・ 細菌病であることから、樹体内に細菌が侵入すると根本的な治療は難しい。そのため防除は予防対策が中心となる。
- ・ 受粉結実後～果実肥大期までにコサイド3000で予防散布する。なお、散布にあたっては、薬害軽減のため炭酸カルシウム剤を加用する。
- ・ 平均気温が20℃付近まで低下する9月下旬～10月上旬になると菌の増殖が再び活発化するため、初夏までに発病がみられた樹については秋以降の発病に注意し、発病がみられた際は収穫後にコサイド3000を散布する。
- ・ 管理作業によっても伝染するため、せん定器具はこまめに消毒する。
- ・ キウイフルーツは風に弱く傷害を受けやすいため、防風対策を徹底する。



## 【果樹全般】

### ●カメムシ類（チャバネアオカメムシ、ツヤアオカメムシ）

#### 予報の根拠

- ・冬期に行った落葉中のチャバネアオカメムシ越冬量調査では、平均越冬成虫は1.5頭/m<sup>2</sup>（平成1.0頭/m<sup>2</sup>）と平成よりやや多い発生であった。
  - ・5月中旬に行ったカンキツの花での叩き落とし調査では、平均寄生虫数は1.4頭/5着花枝（平成1.5頭/5着花枝）と平成並であった。
  - ・県西部地域6カ所に設置しているフェロモントラップにおける6月第1～4半旬の合計誘殺数の平均は、チャバネアオカメムシが50.6頭/箇所（平成169.1頭）、ツヤアオカメムシが10.6頭/箇所（平成15.0頭）と平成より少ない発生であった。
- 予察灯における6月第1～4半旬の合計誘殺数の平均は、チャバネアオカメムシは33.7頭/箇所（平成73.7頭/箇所）と平成より少なく、ツヤアオカメムシは93.0頭/箇所（平成73.3頭/箇所）と平成よりやや多い発生であった。

#### 防除対策

- ・例年モモ、ビワは収穫期まで被害果が発生する。カンキツ、カキ、ナシ、キウイでは本格的なカメムシの被害は7月以降になる。
- ・スギ、ヒノキの近くにある果樹園ではほ場での発生状況をよく観察し、発生が見られたら防除を行う。
- ・本年のチャバネアオカメムシ越冬数、カンキツ花寄生数、フェロモントラップ・予察灯誘殺数の詳細は、病虫害防除所ホームページに掲載している。

## 【チャ】

### <生育の概況等>

6月中旬の巡回調査時では、二番茶摘採前～摘採後と、地域により異なった。

### ●炭疽病

#### 予報の根拠

- ・6月中旬の巡回調査では、4.46葉/1.25m<sup>2</sup>（平成3.17葉/1.25m<sup>2</sup>）の発生が見られ、平成並であった。
- ・感染には新芽生育時に10時間以上の濡れが必要である。1ヶ月予報によると、降水量は平成並～多いことから本病の発生は助長される。

#### 防除対策

- ・降雨により胞子が飛散して感染するため、梅雨明けまでは感染機会が多くなる。防除は三番茶萌芽期から開葉期に実施し、例年発生が見られる茶園では萌芽期と2～3葉開葉期の2回防除を行う。なお、2回防除を実施する際には、1回目に予防効果の高い剤を使用し、2回目に治療効果の高い剤を使用する。

### ●もち病

#### 予報の根拠

- ・6月中旬の巡回調査では、2.24葉/1.25m<sup>2</sup>（平成6.80葉/1.25m<sup>2</sup>）と、平成より少なかった。

- ・本病は新芽生育時に降雨が多く、湿潤な日が続くと多発する。1ヶ月予報によると、降水量は平年並～多いことから、本病の発生は助長される。

#### 防除対策

- ・高湿度条件下で孢子が飛散して感染するので、風通しの悪い山間地域茶園等では特に発生しやすい。二番茶期に発生の見られた茶園や山間地の茶園では、三番茶萌芽期から開葉期にかけて防除を行う。

### ●輪斑病

#### 予報の根拠

- ・6月中旬の巡回調査では、1.18葉/1.25㎡（平年1.77/1.25㎡）の発生が見られ、平年並であった。
- ・本病の発病には25℃以上の高い気温が好適である。他の病害と異なり、降雨の多少は発生程度に影響しない。1ヶ月予報によると、気温は平年並のため、本病の発生は特には助長されない。

#### 防除対策

- ・摘採や整枝によってできた傷口が主な発病部位になるため、常発茶園では二番茶摘採後に速やかに防除を行う。なお、摘採直後に防除ができない場合は、整枝時に摘採面より2cm程度深く刈り、その直後に薬剤散布を行う。

### ●チャハマキ、チャノコカクモンハマキ

#### 予報の根拠

- ・6月中旬の巡回調査では、平均寄生虫数はチャハマキが0.18頭/1.25㎡（平年0.48頭/1.25㎡）、チャノコカクモンハマキは0.08頭/1.25㎡（平年0.30頭/1.25㎡）で平年に比べ発生は少なかった。
- ・6月中旬までの県内各地の予察灯やフェロモントラップでの成虫誘殺状況では、誘殺数は平年並～やや多く、発生時期は平年並となっている。
- ・1ヶ月予報によると、気温は平年並、降水量は平年並～多いため、発生は特には助長されない。

#### 防除対策

- ・6月下旬現在第1世代成虫の発生は、盛期～終盤となっている地域が多く、第2世代幼虫を対象とした防除時期は6月末～7月上旬になる。地域の予察灯やフェロモントラップでの成虫の誘殺状況に注意して適期防除を行う。なお成虫の誘殺数データは病虫害防除所ホームページで提供している。

### ●チャノホソガ

#### 予報の根拠

- ・6月中旬の巡回調査では、平均巻葉数は1.0葉/1.25㎡（平年5.9葉/1.25㎡）で、平年より少なかった。
- ・1ヶ月予報によると、気温は平年並、降水量は平年並～多いため、発生は特には助長されない。

#### 防除対策

- ・新芽生育期と成虫発生期が合致すると発生が多くなる。例年7月中旬に成虫の発生が多くなるが、今年発生が平年並となっている。
- ・地域の予察灯やフェロモントラップにおける誘殺虫数の推移や新芽への産卵状況に注意し、適期防除に努める。なお成虫の誘殺数データは病虫害防除所ホームページで提供している。

## ●チャノキイロアザミウマ

### 予報の根拠

- ・6月中旬の巡回調査では、平均叩き落とし虫数は13.9頭/4カ所（平年15.9頭/4カ所）と平年よりやや少なかった。
- ・1ヶ月予報によると、気温は平年並、降水量は平年並～多いため、発生は特には助長されない。

### 防除対策

- ・例年、三番茶生育期に発生が増加するので、新芽の萌芽から開葉期に防除を実施する。
- ・更新園では、再生芽の生長期間が長いため本種の加害を受けやすい。発生状況に注意し、再生芽の萌芽から生育期に防除を実施する。

## ●チャノミドリヒメヨコバイ

### 予報の根拠

- ・6月中旬の巡回調査では、平均叩き落とし虫数は3.0頭/4カ所（平年2.6頭/4カ所）と平年よりやや多かった。
- ・1ヶ月予報によると、気温は平年並、降水量は平年並～多いため、発生は特には助長されない。

### 防除対策

- ・例年、三番茶生育期に発生が増加するので、新芽の開葉期に防除を実施する。
- ・更新園では、再生芽の生長期間が長いため本種の加害を受けやすい。発生状況に注意し、再生芽の生育期に防除を実施する。

## ●クワシロカイガラムシ

### 予報の根拠

- ・6月中旬の巡回調査では、平均寄生株率は5.8%（平年15.9%）と平年に比べ低かった。
- ・アメダス平年値の気温データに基づく茶業研究センター（菊川市）の第2世代予想ふ化最盛日は、7月22日と予測されており（6月26日時点）、1ヶ月予報によると、気温は平年並のため、第2世代幼虫のふ化時期は平年並と予想される。また、降水量は平年並～多いため、発生は特には助長されない。

### 防除対策

- ・地域のふ化最盛予想時期に、茶園内のふ化状況をよく観察して、適期防除に努める。なお、県内各地のふ化最盛予想日は病虫害防除所ホームページで情報提供している。

## ●ヨモギエダシャク

### 予報の根拠

- ・6月中旬の巡回調査では、叩き落とし虫数は0.12頭/4カ所（平年0.09頭）と平年よりやや多かった。
- ・5月中～下旬の茶業研究センター（菊川市）の成虫誘殺数は、過去5年で最も多かった。
- ・1ヶ月予報によると、気温は平年並、降水量は平年並～多いため、発生は特には助長されない。

### 防除対策

- ・7月に入ると成虫の発生が増加する。茶園内をよく観察し、薬剤感受性の高い若齢幼虫の時期に防除を行う。

## ＜その他病害虫＞

### ●新梢枯死症

- ・本病は、主に新芽の包葉や不完全葉の離脱した傷口から発症する。包葉や不完全葉の多くは新芽の萌芽期から2～3葉期に離脱するので、この時期に降雨が多いと発生が多くなる。また逆に、過乾燥も発症を助長する。
- ・昨年発生の多かった茶園では、三番茶芽の萌芽期から生育期に2回程度防除する。なお、QoI剤（商品名：アミスター20フロアブル、ストロビーフロアブル、ファンタジスタ顆粒水和剤、フリントフロアブル25）は、耐性菌が発生しやすいので同一薬剤として扱い、連用を避ける。

### 【キク（施設）】

昨年度までは露地ギクと施設ギクで調査を行っていたが、今年度からは施設ギクのみで調査を行っている。

## ＜生育の概況等＞

生育は平年並である。

### ●白さび病

#### 予報の根拠

- ・6月中旬の巡回調査では、発生は確認されなかった。
- ・1ヶ月予報によると、気温は平年並、降水量は平年並～多いため、発生をやや助長する（本病の発病適温17℃前後）。

#### 防除対策

- ・発生ほ場では、罹病性品種を中心に薬剤散布を行う。ただし、薬剤によっては薬害が出やすいので、新しい品種では小規模の試し散布を行う。
- ・多湿によって発生が助長されるため、梅雨期には特に多発に注意する。
- ・発病葉は感染源となるため速やかに摘み取り、ほ場外に持ち出して処分する。

### ●黒斑病、褐斑病

#### 予報の根拠

- ・6月中旬の巡回調査では、一部のほ場で発生が確認された（発病株率1.6%）。
- ・1ヶ月予報によると、気温は平年並、降水量は平年並～多いため、本病の発生を助長する（病原菌の生育適温：黒斑病24～28℃、褐斑病20～28℃）。

#### 防除対策

- ・本病は潜伏期間が長く発病後の防除では手遅れとなるので、薬剤の予防散布を行う。多湿によって発生が助長されるため、梅雨期には特に多発に注意する。
- ・発病葉は感染源となるため速やかに摘み取り、ほ場外に持ち出して処分する。土の上に落ちた被害葉が伝染源となるため、被害葉をほ場に放置しない。

## ●えそ病（トマト黄化えそウイルス：TSWV）

### 予報の根拠

- ・ 6月中旬の巡回調査では、発病は確認されなかった（平年値なし）。
- ・ 1ヶ月予報では、気温は平年並であるため、媒介虫であるミカンキイロアザミウマの増殖を特には助長しない。

### 防除対策

- ・ 発病株は伝染源となるため速やかに抜き取り、土中に埋めるかビニール袋に入れて腐らせるなどして適切に処分する。
- ・ ミカンキイロアザミウマの食害が認められる場合には、速やかに薬剤散布を実施する。

## ●アザミウマ類（クロゲハナアザミウマ、ネギアザミウマ、ミカンキイロアザミウマ）

### 予報の根拠

- ・ 6月中旬の巡回調査では、平均被害株率は23.1%であった（平年値なし）。
- ・ 1ヶ月予報では、気温は平年並であるため、アザミウマ類の増殖を特には助長しない。

### 防除対策

- ・ クロゲハナアザミウマやネギアザミウマは葉を食害する。発生初期に葉裏まで十分に防除を行う。
- ・ 開花期のキクの花は特にミカンキイロアザミウマの被害を受けやすいため、蕾の膜割れ時から発生に注意する。
- ・ 施設開口部に防虫ネット（目合い0.4mm以下）を設置し、侵入を抑制する。

## ●アブラムシ類

### 予報の根拠

- ・ 6月中旬の巡回調査では、平均被害株率は0.5%であった（平年値なし）。
- ・ 1ヶ月予報では、気温は平年並であるため、アブラムシ類の増殖を特には助長しない。

### 防除対策

- ・ アブラムシ類はウイルス病を媒介するため、寄生が認められる場合には速やかに薬剤散布を実施する。
- ・ アブラムシ類がつぼみに寄生すると内部で増殖して開花中に被害が生じる。秋ギクの被害が多いので、つぼみが形成されたら防除を徹底する。
- ・ 施設開口部に防虫ネット（目合い0.4mm以下）を設置し、侵入を抑制する。

## ●オオタバコガ

### 予報の根拠

- ・ 6月中旬の巡回調査では、被害株率は0.2%であった（平年値なし）。
- ・ 浜松市のキク産地におけるフェロモントラップの誘殺数は平年並で推移している。
- ・ 1ヶ月予報によると、気温は平年並であるため、オオタバコガの増殖を特には助長しない。

### 防除対策

- ・ 例年7月以降に発生が増加するため、芽における被害の発生に注意し、初期防除に努める。

### 3 季節予報

(1) 1か月予報 (東海地方 令和元年6月20日 名古屋地方気象台発表)

【予報期間】 6月22日から7月21日

【予想される向こう1か月の天候】

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。平年に比べ曇りや雨の日が多いでしょう。

向こう1か月の降水量は、平年並または多い確率ともに40%です。日照時間は、平年並または少ない確率ともに40%です。

週別の気温は、1週目は、平年並の確率50%です。2週目は、平年並の確率50%です。

#### 【確率】

期間	要素	低・少	平年並	高・多%
1か月	気温	30	40	30
1か月	降水量	20	40	40
1か月	日照時間	40	40	20
1週目	気温	20	50	30
2週目	気温	20	50	30
3～4週目	気温	40	30	30

#### 【予報の対象期間】

1か月 : 6月22日(土)～7月21日(日)  
1週目 : 6月22日(土)～6月28日(金)  
2週目 : 6月29日(土)～7月5日(金)  
3～4週目 : 7月6日(土)～7月19日(金)

## (2) 3か月予報(東海地方 令和元年6月25日 名古屋地方気象台発表)

【予報期間】 7月から9月

### 【予想される向こう3か月の天候】

向こう3か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。  
この期間の降水量は、平年並または多い確率ともに40%です。

7月 平年に比べ曇りや雨の日が多いでしょう。降水量は、平年並または多い確率ともに40%です。

8月 平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

9月 天気は数日の周期で変わるでしょう。気温は、平年並または高い確率ともに40%です。

### 【気温】

3か月			7月			8月			9月		
低	並	高	低	並	高	低	並	高	低	並	高
30	30	40	40	30	30	30	40	30	20	40	40

### 【降水量】

3か月			7月			8月			9月		
少	並	多	少	並	多	少	並	多	少	並	多
20	40	40	20	40	40	30	30	40	30	40	30

### 【参考資料】

	平均気温(°C)			降水量(mm)		
	7月	8月	9月	7月	8月	9月
浜松	25.7	27.0	24.1	190	151	249
静岡	25.7	27.0	24.1	278	251	292
三島	25.6	26.8	23.6	213	209	243

\*1981年～2010年の平均 \*降水量は小数点以下を四捨五入しています。

### ※ 利用上の注意

- ・気温・降水量は「低い(少ない)」「平年並」「高い(多い)」の3つの階級で予報します。階級の幅は、1981～2010年の30年間における各階級の出現率が等分(それぞれ33%)となるように決めてあります。(気候的出現率と呼びます)。
- ・晴れや雨などの天気日数は、平年の日数よりも多い(少ない)場合は「平年に比べて多い(少ない)」、また平年の日数と同程度に多い(少ない)場合には「平年と同様に多い(少ない)」と表現します。なお、単に多い(少ない)と表現した場合には対象期間の2分の1より多い(少ない)ことを意味します。

お問い合わせは

静岡県病虫害防除所 〒438-0803 磐田市富丘678-1 TEL 0538-36-1543 FAX 0538-33-0780 URL <a href="http://www.agri-exp.pref.shizuoka.jp/boujo/boujo.html">http://www.agri-exp.pref.shizuoka.jp/boujo/boujo.html</a>
--